

館報 教育記念館

No. 89
平成29年11月 発行



きらめき未来塾 右脳活用道場



思考道場 秋山 仁スペシャル公開授業



ものづくり展



さんすうワールド展

主な内容

◎教育時評 富山県教育委員会 生涯学習・文化財室 室長 菊池 政則	2
◎第27回 郷土の先賢顕彰者 堀田 善衛・雪山 隆弘 中野 双山・継続顕彰者	3
◎企画展 「肖像画で見る郷土の先賢」	6
◎恒例展 「第8回児童・生徒によるものづくり展」	
◎恒例展 「第15回さんすうワールド展」	7
◎「きらめき未来塾」 右脳活用道場 思考道場 お笑い道場	
◎元気な地域づくり、元気で創造性豊かな人材の育成及び支援事業 ・平成29年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業	
◎恒例展「第14回子どもの目 自然不思議発見写真展」	8



発行所／公益財団法人 富山県ひとづくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
(教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076) 433-2770)
発行人／富山県教育記念館 館長 伏黒 昇 印刷所／いおざき印刷株式会社



「こころ豊かに生きる」～音楽を楽しむ～

富山県教育委員会 生涯学習・文化財室

室長 菊池 政則

人は生まれながらにして、多くの能力を持っているという。

例えば、赤ちゃんの手のひらにそっと指を添えるとぐっと握り締めたり、大人の呼びかけに微笑んだりする行為はよく知られている。音に注意を注いだり、明るさや動きを目で追ったりすることもその一つである。中でも、音には非常に敏感で、赤ちゃんは生まれつき「音楽を愛する心」を持って誕生していると言えるようである。

しかし、多くの場合、このような能力はそのまま放っておくと退化し、日常の変化に徐々に反応しなくなってしまふ。大人になると、それがさらに進み、大きな変化には驚いたり反応したりするが、その刺激が意味なく繰り返されると、そのうち反応しなくなり、ついにはその変化を無視してしまうようになる。

「音楽を愛する心」、その能力を高めた人は、この世には大勢いるが、その人たちは生まれつきの能力を退化させず、進化させた人たちと言える。いずれにせよ、もともと「音楽を愛する心」を持って誕生しているのが人間であるとするならば、「音楽を楽しむ」ことは本能であろう。

さて、「音楽を愛する心」を進化させた人たちの中で、音楽家と呼ばれる人たちがいるが、その音楽は、数百年経っても今なお、私たちの生活の中に流れ、息づいている。中でも、軽快で明るいイメージの音楽を次々と生み出した作曲家として、よくモーツァルトの名が挙げられる。先日、ネットで検索していると、「モーツァルトが現代に生まれていたら一体どうなっていただろう？」という、とても興味深い文面を発見した。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、18世紀に活躍した、誰も知っている天才音楽家である。3歳からチェンバロを弾き始め、5歳の時には最初の作曲を行っている。幼少時から即興演奏が得意中の得意であった。神童と呼ばれ、ヨーロッパを演奏旅行で駆け回り、その場で聞いた長い音楽も聞

き覚えてすぐに軽やかに即興演奏してみせたり、門外不出の秘曲を暗譜で書き記したりするなどという、数々の神業のような逸話を残した宇宙人的な天才であった。

このモーツァルトが常に時代の最先端を走る音楽の創造者だったことを考えると、今なら誰も聴いたことのない独自の音楽をこの世に生み出したであろうことは想像に難くない。案の定、ネットでも「モーツァルトは、現代での最先端の音楽である電子音楽に、きっとはまっていたんじゃないか」という予想だった。このように想像を巡らすのも、「音楽を楽しむ」ことの一つである。

先ほども触れたが、この稀有の音楽家モーツァルトの楽曲を、21世紀の現在、テレビやラジオ、ネット等で流れる映画やドラマ、CMなどでもよく耳にするが、私たちは何気なしに心地よい曲として聞いている。

「クラシック音楽」というジャンルは、とかく難しいもので敷居が高いと勘違いされているが、案外、実は生活に密着した、「楽しむ」ことのできる音楽である。

「クラシック」とは、直訳すれば「古典的」であり、「クラシック音楽」とは「古典的音楽」と言うことになるが、現在、一般的には「西洋の芸術音楽」を指している。もちろん、モーツァルトの時代で、その音楽は「古典」であるはずもなく、最先端の「新しい音楽」であったろう。

現代でも、日頃あまり「クラシック音楽」を聞いたことのない人にとっては、それは「古典」ではなく、まさに「新しい音楽」と言える。赤ちゃんと同様に、新しいものや変化するものを生活の中に取り入れていくことほど、心がうきうきと湧き立ち、楽しいことはない。

今日からでも、「こころ豊かに生きる」ために、新しく「音楽を楽しむ」ことを始めてみてはどうだろう。



第27回 郷土先賢室顕彰者紹介



国際的な感覚を備えた芥川賞作家

ほった よしえ
堀田 善衛 (1918~1998)

善衛は、射水郡伏木町(現高岡市)で廻船問屋を営む堀田勝文、くにの三男として生まれた。昭和6年(1931)3月、善衛は伏木尋常小学校を卒業後、石川県立金沢第二中学校に入学した。当時の伏木港が日本海側の主要国際港であったこと、幼少時に父 勝文が定期購読していたロンドン・タイムズなどが身近にあったこと、中学三年時の下宿先である宣教師宅で英語のみの生活を送ったことなどにより、善衛の国際的な感覚が幼少時から養われてきたことが窺われる。

昭和14年(1939)4月、善衛は慶應義塾大学法学部政治学科に入学した。大学受験のために上京したとき、善衛は二・二六事件に遭遇した。この時のことについて、「生家が没落したという経験とも重なって、国家もまた永久不変ではなく、軍隊の反乱などによって崩壊することもあるのだという、中世の無常観ともつながる感覚を与えられた」と、回想している。善衛は、転科した文学部仏文科を昭和17年(1942)9月に卒業した。大学時代、伊集院清三との出会いをきっかけに『批評』の同人となり、詩を書き活躍するとともに、河上徹太郎、小林秀雄、中村光夫等を知った。

昭和20年(1945)3月、善衛は上海で終戦を迎え、その後中国国民党中央宣伝部に徴用された。この頃、武田泰淳、石上玄一郎、草野心平を知り、詩誌『歷程』の同人となる。中国での体験は、善衛の生き方に影響を与え、後にそこから多くの作品が生み出されることとなった。

昭和22年(1947)1月に帰国した善衛は、昭和26年(1951)まで多数の作品を発表した。特に、昭和26年(1951)8月に「廣場の孤獨」(前編)を、9月に「廣場の孤獨」(全)、「漢奸」を発表し、これらの作品は、同年度下半期の芥川賞を受賞した。そして、昭和28年(1953)、国際的な舞台における「組織と人間」を追求してきた善衛の文学の集大成となった「時間」を発表する。

昭和52年(1977)5月、善衛はスペインへ移住し、昭和62年(1987)12月までの約11年間スペインに滞在した。この間、画家ゴヤの長編伝記「ゴヤ」四部作を完成させ、第4回大佛次郎賞を受賞する。昭和54年(1979)3月、スペイン政府より、賢王アルフォンソ十世十字勲章を授与され、6月にはアジア・アフリカ作家会議における活動の功績で、ロータス賞を受賞した。平成6年(1994)、これまでの功績により、高岡名誉市民となる。平成7年(1995)には長年の文学的業績により朝日賞を受賞し、平成10年(1998)3月、日本藝術院賞を受賞した。9月5日、脳梗塞により死去。享年80歳。

専門員 松本 純

平成29年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



「小麦農林10号」を開発し、世界を食料危機から救った農学者

稲塚 権次郎 (1897~1988)

明治30年(1897)、東砺波郡藁谷村西明(現南砺市西明)に生まれた。

ダーウィンの「進化論」で遺伝や品種改良に興味をもち、大正4年(1915)、東京帝国大学農科大学(現東京大学農学部)に入学し、蚕の遺伝の研究に励んだ。卒業後は農商務省に入省し、大正9年(1920)、農事試験場陸羽支場(現秋田県大仙市大曲)に赴任し、水稻の品種改良に取り組み、成果を挙げた。大正15年(1926)からは、岩手県農事試験場において、小麦の品種改良に取り組み、昭和13年(1938)までに8種類の新品種を作出した。その中で昭和10年(1935)に登録されたのが「小麦農林10号(Norin10)」である。戦後、この種子がメキシコで小麦の研究をしていたN・E・ポーローグ博士の手に渡り、メキシコの小麦との交配により、従来の2~3倍の収量も可能となる品種が幾種類も作出された。これらが数多くの国々に広がり、それぞれの国土に適した品種が作出された。この成果は1960年代に広がった「緑の革命」の一翼を担い、世界の多くの人々を飢餓から救うこととなった。

専門員 松田 啓宏



「思いっきり自己表現ができる場」を求めて 「雪ん子劇団」を創り、育てた伝者

雪山 隆弘 (1940~1990)

隆弘は、昭和15年(1940)、大阪府高槻市の浄土真宗常見寺の次男として生まれた。

当時は学校演劇が盛んで、隆弘は、自身が通う如是小学校の児童劇団に入った。大阪府の児童劇コンクールで2位になったことがきっかけで、吉岡たすく等の指導を受け、少年時代はラジオドラマの子役タレントとして活躍した。

昭和34年(1959)、早稲田大学文学部演劇専修に進んだ隆弘であったが、大学での演劇に満足できず、劇団「四季」や「劇団青俳」に籍を置き、演劇活動に没頭した。劇団青俳の木村功等に大きな影響と刺激を受けた。しかし、大学4年生の時「食っていくのは大変。いや、食っていけない。」という実感から、迷いに迷い、俳優の道を断念した。

大学を卒業した昭和38年(1963)、(株)産経新聞社に入社、社会部遊軍記者となった。その後ニッポン放送に出向し、ラジオのパーソナリティも経験した。この頃のジャーナリスト活動を通して、いろいろなものを見、いろいろな人に出会ったことがその後の地域文化活動の基本になった。この間、北日本放送のアナウンサーをしていた雪山玲子と結婚した。

昭和48年(1973)、隆弘は妻玲子の実家である善巧寺(宇奈月町浦山)の後継者として得度すると、善巧寺を「開かれた寺にしたい」と考えた。旧知の永六輔の協力を得て落語会を開催すると、毎回多くの人々が集まった。また、心豊かな子供たちを育てようと日曜学校を開き、寺を文化活動の場として開放した。だが、もっと自己表現できる場として児童劇を始めたいと隆弘は考えた。妻玲子も共感し、昭和54年(1979)11月25日には、ことばの教室“雪ん子劇団”を誕生させた。劇団の稽古では、顔、目、あご、口の体操やことばの体操に加え、反射神経や感情の開放を遊びを通して身に付ける「手つなぎ鬼ごっこ」を取り入れた。隆弘は、これを雪山メソッドと呼んでいた。

4か月後の昭和55年(1980)3月26日、500人余りが集まった富山本願寺でのミュージカル『うちのとうちゃんえらいんだ』、ぬいぐるみ劇『なかまたち』が雪ん子劇団の初舞台となった。以降劇団の公演は、県内外で年間5~10回行われ、多くの人々に知られるようになった。「自分のことよりちょっと他人のことを」の思いを大切に、開かれた寺にしたい、豊かな表現力を育てたいと一日一日を精一杯生きた隆弘であったが、病に倒れ、劇団創立から11年目の平成2年(1990)9月、生涯を終えた。享年50歳であった。創立以来、県内外での公演数は80回を超えていた。

隆弘が逝去した翌年の平成3年(1991)、雪ん子劇団はその教育的意義と活躍が高く評価され、正力松太郎賞を受賞した。隆弘(男先生)の思いは妻玲子(女先生)や子供たちに引き継がれ、活動はその後も続いた。しかし、平成27年(2015)3月21日、多くの人々に惜しまれつつ、劇団は35周年記念さよなら公演を最後に幕を閉じた。

専門員 根塚 昌志

平成29年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



自由民権運動に女性の地位向上を懸けた女性活動家

中川 幸子 (1857~1910)

安政4年(1857)、西加積村上島(現滑川市上島)に生まれた。

17歳で豪農の若旦那と結婚したが、家庭を顧みない放蕩三昧の生活に耐えられずに23歳で離婚。深い悲しみの中、ルソーの「社会契約論」に感銘を受け、もっと自由な人間として生きていくために、学び、人の役に立つ活動をしようと上京した。

文明開化で新しい思想が入ってくる中、知識を男性と同じまでに引き上げようと日夜勉学に励み、男尊女卑の考えが中心だった当時の社会の中で、幸子の目は女性の地位向上のための運動に向けられていった。

自由民権運動が全国に広がる中、幸子ははじめ頭山満の門下に入る。その後、板垣退助の門下に入り、尾崎行雄や犬養毅等とも親交をもった。

女性運動家は当時極めて珍しく、神奈川や東京の各地で男女同権演説会を開催するなど、「民権の三女傑」の一人と称された。

明治35年(1902)、東京麹町に苦学生を支援する私塾「三省学舎」を開き、国の役に立つ次代の人材を育成しようと青少年の教育に力を傾けた。

専門員 松井 功一



日本三大仏 高岡大仏の彫刻家

中野 双山 (1881~1940)

双山は、明治14年(1881)、中野又次郎の長男として射水郡高岡町定塚町(現高岡市定塚町)に生まれた。明治27年(1894)に入学した富山県工芸学校鑄銅科(現県立高岡工芸高校)で鑄物の原型の作り方を学ぶうち、銅器の彫刻家になりたいと考えた。明治36年(1903)に東京美術学校(現東京藝術大学美術学部)に進み、木彫などを学んだが、明治38年(1905)に学校を中退し高岡に戻ってきた。

明治30年代後半、明治33年(1900)6月の大火で焼けてしまった木造の高岡大仏を、燃焼しない青銅で作る直そうという機運が高まっていた。母校の工芸学校で教師をつとめる傍ら原型師の仕事に携わっていた双山に、明治41年(1908)頃に「高岡大佛再興事務所」より高岡大仏の原型づくりの依頼があった。双山が27歳の時であった。当時、「原型師」の専門家は地方の小都市にはほとんどいなかった。この高岡大仏の再建には、第6代高岡市長松島喜五郎の名も連ねており、青銅による大仏は地場産業の振興策として格好の事業でもあった。双山は大仏原型製作という郷土の期待を背負って依頼を引き受けた。

明治42年(1909)頃から、双山は大仏製作の着想を得るため全国行脚に出た。奈良大仏をはじめ、各地の数多くの仏の姿に触れた双山は、仏の壮大さとその優れた建造技術に心打たれ、「穏やかな表情の御仏を作ろう、そのような御仏こそが高岡の風土にふさわしい」と考えるようになった。大仏製作に着手した双山は日々製作に没頭し、明治44年(1911)9月には、大仏の頭部を完成させた。しかし、その後は資金が足りないなどの理由で作業はたびたび中断した。ようやく開眼式を迎えたのは、大火以来実に33年、高岡大仏復興事務所の趣意書が出されてから26年を経た、昭和8年(1933)5月であった。

大仏の頭部を完成させた後、双山は県内各地の像製作の傍ら、書画の製作や作陶、富山県立工芸学校の初代同窓会長を務めるなど趣味や人の世話にも熱心であったが、昭和15年(1940)9月5日に一生を終えた。享年59歳。

高岡市民は、双山没後も大仏に手を加え続け、高岡大仏落慶法要が行われたのは昭和56年(1981)であった。高岡大仏は原型・鑄造とも高岡工人の手によるもので400余年の伝統を誇る高岡銅器の象徴となっており、総高15.85m、重量65tというスケールの大きさは圧巻である。この高岡大仏は奈良、鎌倉と並ぶ日本三大仏に数えられ、現在も高岡の象徴として市民に愛され続けている。

専門員 福田 暁

平成29年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



社会から得た利益を社会へ還元した「丸井」の創業者

青井 忠治 (1904~1975)

明治37年(1904)、射水郡小杉町(現射水市)に生まれた。青井家は旧家であったが、父の破産や両親の離婚、2歳の時の自身の左目失明、相次ぐ父母との死別等、不運な幼少年期を送った。

大正11年(1922)、県立工芸学校を卒業し、東京芝の家具の月賦販売「丸二商会」に入社。昭和6年(1931)、暖簾分けで「丸二商会中野店」を開店した。月賦販売に対する悪評を拭い去りたい一心で、良品を大量に仕入れてコストを抑え、安く提供し売上を伸ばした。昭和10年(1935)、阿佐ヶ谷に出店し、「丸二」から「丸井」へ改称。昭和12年(1937)には株式会社化した。昭和35年(1960)には、「月賦」を「クレジット」と言い換えて、日本で最初のクレジットカードを発行した。「景気は自らつくるもの」という商売哲学の下、昭和40年(1965)に東証一部に昇格し、5年後には月賦百貨店業界のトップ企業に育て上げた。

事業への飽くなき挑戦の一方、“一生をかけて得られた私財を惜しみなく社会へ還元する”という崇高な理念のもと、母校に記念館・文庫などを寄贈したほか、奨学基金を設立するなど、郷土の発展に貢献した。

専門員 平野 強

「肖像画で見る郷土の先賢」

4月5日(水)～5月28日(日)



富山県の所蔵する「郷土の先覚100人」の肖像画を、その生き様とともに展示しました。これは当館が毎年顕彰を続けている大勢の郷土の先賢を広く県民に周知し、先賢たちの力強い実践力や強い意志に学ぶ機会としました。

今回は、以下のとおり政治・宗教・スポーツ・伝統産業の分野で活躍した先賢18名を展示しました。

★政治分野（9点）

稲垣 示 島田 孝之 武部 尚志 米澤紋三郎 島田七郎右衛門
石坂 豊一 松村 謙三 佐伯 宗義 吉田 貫

★宗教分野（3点）

金山 穆韶 梅原 真隆 亀谷 凌雲

★スポーツ分野（4点）

梅ヶ谷藤太郎 太刀山峰右衛門 佐伯 平蔵 宇治長次郎

★伝統産業（2点）

松井 角平 老子次右衛門

第8回「児童・生徒によるものづくり展」

6月7日(水)～7月9日(日)



県内には、高岡市のものづくり・デザイン科の取組をはじめ、伝統的、創作的な作品の製作に取り組んでいる小・中・高等学校が多くみられます。教育記念館では、発表の場のひとつとして毎年「児童・生徒によるものづくり展」を開催しています。

今年も180点余りの作品が寄せられました。来場者はじっくりと作品を鑑賞し、作品の多彩さに驚いたり、技術の高さに感心したりしていました。

恒例展

－クイズ&パズル－ 第15回 さんすうワールド展

7月19日(水)～8月27日(日)



夏休み期間中に算数の面白さを味わってもらおうと20問のクイズや多数の立体パズルを展示しました。今年はプロ棋士の藤井聡太四段が幼い頃に遊んで、直観力を育てたことで話題となった積木パズル「キューボロ」も新しく展示に加えました。訪れた人たちは、暑さを忘れ、考える楽しさを味わっていました。

きらめき未来塾 (夏休み期間中)

右脳活用道場 講師 森 みちこ
(漫画家)

思考道場 講師 秋山 仁
(東京理科大学 理数教育研究センター長)
県内講師

金森 豊、滝脇裕哉、大甲恵美
松原千佳、杉田直人

お笑い道場 講師 安野家 仁楽斎
(社会人落語家)



お笑い道場

子供たちの創造力や表現力、柔軟な思考力を養うことをねらいに、今年度も夏休み中に3つの道場を開催しました。参加した子供たちは、いろいろなことを教えてもらい、チャレンジしながら大いに活動を楽しむことができました。

平成29年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業

子供が地域の人や自然、歴史、文化にかかわる「ふるさと学習」等に地域と連携して取り組む学校に助成する事業です。今年度は次の5校が助成校となりました。



28年度助成校の1校 氷見市立十二町小学校(イタセンパラを守ろう)

・助成校・

- 立山町立高野小学校
- 富山市立大沢野小学校
- 射水市立大島小学校
- 高岡市立福岡小学校
- 氷見市立上庄小学校

恒例展「第14回子どもの目、自然不思議発見写真展」

■9月6日(水)～10月1日(日)

学校での学習や日頃の生活の中から、子供たちの目を通して発見しためずらしい自然界の場面を撮影した写真を89点展示しました。「子供たちの素直な気持ちが写真によく表れており、いつまで見ても見飽きない…」等、参観者からのあたたかい評価をたくさんいただくことができました。優秀作品は次年度の小学生の「夏のチャレンジ」に掲載されます。



ネコのしっぽ (1年)



だいこんオラフ (2年)



こぶが出てびっくり (3年)



絶対離さないぞ～ (4年)



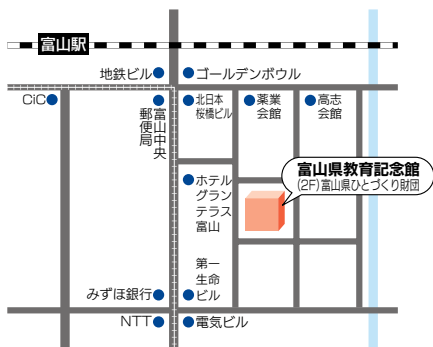
きゅうり星人 (5年)



夕やけの海 (6年)

これからの展示予定

- | | |
|----------------------------|---------------------|
| ・ 第35回特別支援学校 みんながんばってます作品展 | 10月27日(金)～11月12日(日) |
| ・ 第48回富山県造形教育作品展 | 11月18日(土)～12月3日(日) |
| ・ 第13回「アイデアロボットフェスタ」ロボット展 | 12月9日(土)～1月14日(日) |
| ・ 第28回富山県中学校美術展 | 1月26日(金)～2月10日(土) |
| ・ 第11回富山県版造形教育作品展・秀作回顧展 | 2月21日(水)～3月25日(日) |



あ・と・が・き

異常気象による自然災害が世界各地で起こるようになりました。地球環境をはじめ様々な問題を全人類が、力を合わせて解決しなくてはいけない時期にきていると思います…。さて、この館報がお手元に届くころには、郷土先賢室での新しい顕彰展示が始まっています。どうぞ、富山県教育記念館へお出かけください。

富山駅
近く

会議室を一般の方に**安価**でお貸しして、打合せや趣味の活動などにご利用いただいております。詳しくは教育記念館ホームページをご覧ください。
<http://www.t-hito.or.jp/reserve/index.html>

会議室をご利用ください!

